

日本の地圖

(二)

天保から明治大正への進歩

藤田元春

七

地圖の出版をみると、いかなる國でも時代が下れば下る程、其種類が多くあり、其地形描寫も進歩し、其應用も廣くなるものであるが、我國の如く鎖國三百年の間に於て文運の著しく進歩した所では、之を隣邦支那などに比べて格段の發達を遂げたことは、栗田元次氏の江戸時代刊行の古地圖をみても明である。氏はこの時代の地圖を其様式から挿圖、折圖、圖帖、其版式から、木版、銅版、筆彩、彩版（この最後は予の所謂カツバ摺である場合多い）其圖式から平寫（所謂方格圖式プロゼクション）最も多く、臨寫鳥瞰及び混合式があり、其地形現圖法からみ

ると、山形描寫から暈滃式にすゝみ、其種類からみれば世界圖、州國圖、日本總圖、地方圖、國圖、郡圖、町圖、名勝圖、道里圖、歴史圖等殆んど近世歐米の先進國に見はる地圖のあらゆる種類が網羅しつくされて出版されたものである。凡そ如斯く地圖の種類の多いことは、當時の世界では類のない點であつて、元祿にきたケンプエル、文化文政にきたシーボルトなどの採訪する所となつて、その多くの道里圖、總圖、國圖、町圖は、あちらで既に出版されたのであつたが、我等は今日になつて、これらの古地圖を採蒐しやうと企てると、集むれば集むるに従つて其類が多く、同じ一つ所の町の圖でも、大中、小、精密、疎略、價の高いもの、安いもの

色のついたもの、つかないもの、年代の古いもの、新しいもの、又は初版から四五版に達し、書肆の異なるにつれてそれはそれは數限りがないので、結局は常に新しい版の出現に面喰つて茫然自失せざるを得ないのが實際である。しかもその中で徳川の中世以前といへば、大體書肆がしまつてゐるし、其の残つてゐる地圖の大小、種類なども大凡の限りがあるから、今日では殆ど好筆家に採集し盡くされて容易に之に出會はない、けれども特に徳川氏末期天保以後といふ時代から明治へかけての地圖類となると、その數と種類は格別に多いのに面喰はされるのである。果して然らばどうして、かうしたことになるたのであらうか？

八

思ふにこれはその前代十八世紀末から十九世紀の初頭にかけて、永い鎖國時代の扉も、やうやうぼころびが出來そめ、特に北方ロシアの侵犯が朝野の眼をさまし、長崎へやつてきた西洋

の文化も急速度に國內の有識に浸潤しはじめた結果であつて、安永年間に或は北方蝦夷地の取調がはじまれば、一方民間で長久保赤水が「日本輿地路程全圖」を出版するやうな氣運になつたので、寛政十二年には伊能忠敬の蝦夷地の實測となり、やがて十又八年をへて彼の大日本沿海實測圖が出來上つた、かうした實測に際し伊能は殆ど全國を周遊したから各地至る所での、地理的關心を呼起したとみえ、其後天保三年から九年になると、明樂飛驒守、田口、大澤等の入々が幕命を奉じて、天保國繪圖、(總數百九十七葉、大幅六十八帳の郷帳)なるものを全國的に大成するに至つたのである。これ實に正保以後三回目に出來た最新最精の國繪圖であつて、日本流の地圖の最後の大成ともみるべきものであつた。

上に於てさうした編輯がはじまると下に於ても之に倣ふ學徒が輩出する。そこで多くの人は爭うて自分の國の地圖を要求したから、前代に

出來てゐた國繪圖を、此際改正増補して新に出版する事が頗に一代の流行ともなつた。故に現存古圖を蒐集する人の文庫には、例令ば「細見新補近江國大繪圖」とか「新改正攝津國名所舊蹟細見大繪圖」とか題された天保年製の改補ものが多いのみでなく、栗田氏の蒐集によると

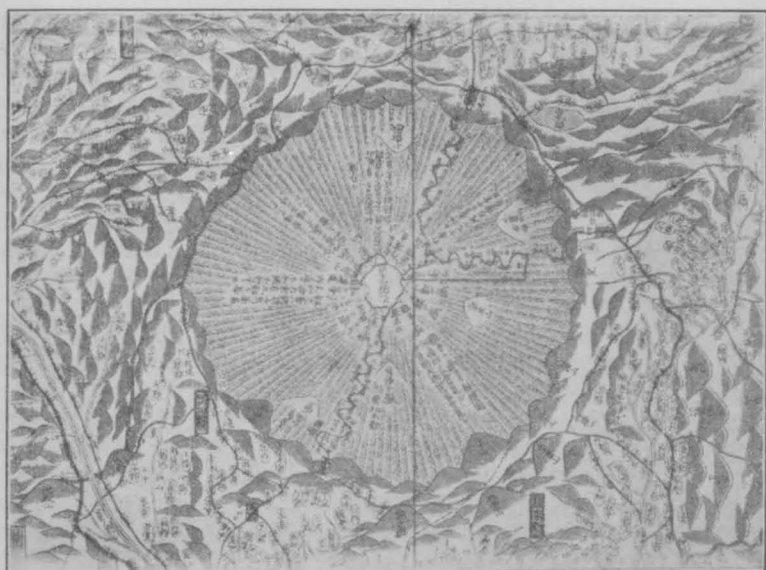
遠江(天保二)武藏(天保七)尾張、美濃、飛騨、信濃(いづれも大繪圖天保六)佐渡(天保十三)丹後(天保十一)豊後(天保十三)

といふ多數が、前代になくて天保度に新に出現したのである。(豊後大分市圖書館には當時に出來た各郡圖の大繪圖筆寫が現存してゐる。)

さうした時流に投じ、伊萬里燒の皿(丸形大と、矩形小)即日用の器物にさへ日本の略圖が寫されて賣り出される程にあつたのであるから天保年間の地圖といふものは需要も多く、其出版も實にすばらしかつたといへる。我京都市のごとき「改正京町御繪圖細見大成」といふ五千分一の大縮尺をもつた大幅、それは前にも、亦後にも出來なかつた大さと精巧さを持つたものが

出來た。そこで國繪圖が復活し小さい袖珍小圖や、略圖(半紙一枚摺、一錢か二錢の廉價もの)の類が幅をきかすと、さらにこれらの名勝巡禮を目あてにした地方圖も出來だした。これ又前代未見の一進歩であつて、天保十二年には柳堤漁夫が「五畿内掌覽」(九二・五×八三・五糎)といふ美しい折本を出版した。これもよくうれたとき、筆者は其増補版をも併せて所有してゐる程である。

しかしその圖柄をみるといづれも方格圖の流を汲んだ古法で、山はへ字形であり、各驛の道里を明にするに過ぎなかつたが、かうした時代の最高の產出として秋山永年が天保癸卯十四年に出版した「富士見十三州輿地全圖」といふ大幅は(一七六×一五〇糎)カッパ摺であつて地形描寫といひ、其印刷の鮮明さといひ誠に徳川時代を通じての一大作傑であり、我國古流の地圖がいかにか精巧であるかを立證するものであつた。船越守愚が之に題して「其精覈巧密遠出於先



第九圖 富士見十三州與地全圖の富士山

賢之上」と喝破したのも無理ではない。ことに本圖に推稱すべきことは、その富士山の地形を示すにあつて、在來のへ字形を以てせず、空中から之を俯瞰した、ケバ式類似の畫法を用ひたことである。ケバは後にものべる通り明治年代の地形現圖法であるが、さうした形の發達の初期を象徴するものとしても秋山永年の工夫は我現圖法上、空前の發明であつたとせねばならないのであつた（附圖參照）。

精巧な良圖が出ると、それがよく賣れて粗惡な圖は賣れないかといふとそうではない、一方に精巧な圖があつて人の注意を引いても、讀者の數の少い前代の事であるから、一般の大衆には「猫に小判」である。故に天保時代に於てもかうした良圖よりも、廉價な細見圖や、旅行案内圖、もしくは西國巡禮圖、金刀比羅參詣圖といった類のものが極めて多數に賣りだされたので、心ある著者は、十把一からげの版木と一視されることを恐れた。故に寛政四年に司馬

江漢が彼の世界圖銅版を出版するや、不許買人と印した程であるが、天保年代には益々其弊を現はしたのでもあらう。天保十三年長山貫録の「伊豆七島全圖」の如きは「不許市賣」と題したばかりではなく、

「謹以內告邸報、創板限五百部、無此印者係于僞刻」

といふ墨印を押捺してゐる。カツバ摺であり地誌を併記した良著であるが所謂市賣をせないで限定出版をしたといふ所に著者の矜があり、其商略もあつた。五百部といふ數が或は當時の普通の初版數であつたと考へしめるのも面白い點で、これは出版史上注目すべき一資料である。いづれにしても天保年代と地圖出版といふことは時勢の然らしむる所もあつたとはいへ正に注意すべき種々の現象を呈したといつてよいであらう。

九

長久保赤水の大日本輿地路程全圖は方格圖であるが、はじめて經緯線が引いてあるので有名で

ある。しかしかれの經緯線は今日の地圖のやうに明に東經何度といふことを記してはゐない。京都を中度にしてはあるけれども、經度はすべて數を入れない。たゞ緯線に北緯三十二度から四十二度までを記したに止まる、故に文化八年の菊地虎松の「改正日本圖」でも、緯度は同様に記しても經度の方は之をブランクにしておく、元治甲子に出來た松田玄々堂の「懷寶銅版大日本輿地全圖」の如きもやはり赤水の地圖を銅版にかへただけで、緯度の方は同様に記しても、經度は記さないである。前述の富士見十三州圖の如きでさへ、題者舟越守愚が之に注して、

若夫經度之差、潮汐之辨、則天文地志之所職、無所用於茲、不必載也。

と記した程に、從來の地圖家が之を無視すること、殆ど當時一般の風であつたのである。しかし慶應元年官許の橋本謙の著した「大日本輿地全圖」まで時代が下ると、緯度三十一度から四十二度までをしるし、經度には百三十六、七、

八、九といふ注記があつて東百四十三度に達してゐるのである。よくみると東百三十五度が山城と近江との國境を通じてゐるといふ大誤差があるので。この經度の據る所は何であつたかわからない、餘程の無鐵砲さである。

そこでかうした經度について、我國に於ける發達の跡を調べてみると、文化元年に出來た近藤守重の手射圖法による「考定分界圖」は緯度は右の如く三十一度から四十二度に達し、經度は東經百四十五度から百六十五度の間に日本を記してゐるのである。恐らくこれが經度を明記した日本人の最初の作であらうと考へるが、これは實はモルチールの原圖に従つたに過ぎない。蓋しこの經度は文化七年高橋東岡が官命によつて作つた「萬國新訂全圖」にひとしいもので、高橋の説明によると、其零度は福島十二地内勿囉島である、司馬江漢の寛政版の「地球圖」でも、其の度は福島であつて十八世紀の古い外國地圖はすべてさうした經度になつてゐたのであるが

西洋の地圖が數多く輸入されるにつれて、この前代の福島經度は漸次改訂さるゝに至つた。その最も重要な因子になつたものは實に文久元年（一八六一）に出版した佐藤政春の新刊輿地全圖である。この圖は一八五七年荷蘭の書肆ゼ・フ・ステムレルの翻刻であるが、福島を〇度とした従前の地圖でなく、上欄は英國グリニチ天文臺を〇度としたもの、下欄にはワシントンを初度としたもので、地圖の枠そのものに「綠威ヨリ偏西經線此線ニ四度三十二分ヲ加ユレバ俺特提（アムステルダム）ノ午線ヨリ偏西經線ヲ得」又は「四度三十二分ヲ引ケバ、アムステルダムノ午線ヨリ偏東經線ヲ得」と明記してゐるのであつて經度の起點をグリニチ天文臺に起算した日本版初發の地圖となつてゐるのである。それによると我國は東經百三十度から五十度に位し、百三十五度が明石附近を縦斷することになるのである。

勿論我國の經度は、日本地圖測量小史に述べ

である通り、西紀一八八一年即明治十四年から十五年にかけて米國海軍士官デヴィスやノリスの測定で長崎と横濱の經度(グリニチ〇度)がきまり、近くは大正四年グアムと東京との電信經度測定や、同五年秋シベリヤ經由の電信測定により、大正六年十一月に至つて、東京觀測點は經度九時十八分五十八秒、七一四と確定した程に全く最近の定數ではあるけれども、又勿論明治十七年の萬國子午線會議の決定でグリニチ天文臺の子午線が本初子午線と定まつたのではあるけれども、さうした決定よりも、ずつと古く文久元年即約廿年以前に、既にグリニチ子午線の日本版地圖が存在し、下つて明治六年博覧堂の萬國輿地全國の如く其の跡に従へるものが多く出来たのであつたから、明治七年に大阪師範の井手猪之助がつくつた「大日本地理全圖」の如く、全くこのグリニチ子午線に従ひ、百三十五度が明石附近を通る所の圓錐圖法による地圖を公刊した例さへあるのである。凡て如斯き經緯

線の正確な認識と正しいプロゼクシヨンの出現は、實に明治時代の地圖學界の一進歩であつて、長久保赤水や伊能忠敬によつて代表された徳川時代後期に比して更に一段の發達をトすべきものであつたのである、井手氏の地圖はそれが正しい圓錐圖法であるばかりではなく、山脈のごときすべてケバ書きであつて、カッパ摺の色彩も鮮明であり、大さは九〇×九九糎に達し、紙質もよければ銅刻も臥龍軒の作で、其出来榮は明治初年の作として推獎すべきものゝ一であつた。蓋し當時は師範學校に既に餘程立派な學者がゐた時代であつたのである。

しかしこれらは勿論一二の先覺者の作であるから其頃の日本圖が何れも正しいプロゼクシヨンをもちつたといへない、例令ば明治十六年に京都の風月庄左衛門の出版した「明治改正大日本明見細圖」の如き後出であるにも不拘、全く經緯線を廢してゐるといふのがあり、萬國輿地圖などでも京都の橋本澄月の作つたものゝごとき

多くは盜竊であつて、粗惡見るに堪へないものが臆面もなく出版されたのである。處が筆者の所藏に明治九年の平田槲の作つた「大日本國圖」がある。これは方格圖で勿論赤水圖の亞圖ではあるが、京都の銅版工福富正爲、正利の二人がかゝつて朝鮮の略圖まで加へたものである。が

この圖には緯度は従前通りであるのに、經度は東京〇度で起算し、東四度から西十四度に至る經線を引いてゐるといふ新意があるのである。同時に山脈はすべてケバ書きにかはつてカッパ摺になつてゐるのである。

(未完)

世界戰後の地名考 (六)

瀧川規一

アヅウール(Adour)。佛蘭西の河。古代アッルス(Aturus)と稱した河。ブレニース山脈に發しオートジョネ(Hautes-Pyrénées)、ジパール(Gers)、ランド(Landes)の地方を流れてビスケ灣(Bay of Biscay)に注ぐ。長さ二百哩、そのうち八十哩ばかりは航行も得、諸處に運河を設く。

アドウア(Adowa, Aduwa 又は Adoa)。アビ

シニア(Abyssinia)國の都會。チグレ(Tigré)州の首府。海拔六二七〇呎の高地にあつて、チグレの内地と海岸との貿易中心地であり人口五千。

一八九六年三月一日伊太利軍はこの地に於て佛蘭西製ライフル銃を以て武裝せるアビシニア人の爲めに敗れた。夜間進軍中伊太利將軍の計畫が齟齬し伊太利軍は敵の攻撃を受け戦死者